

2022.12.16

ELSIカタルシル #004

見上 公一さんに伺う



慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室准教授
見上 公一さん

【略歴】

- 2004年 早稲田大学政治経済学部経済学科卒
- 2010年 オックスフォード大学サイドビジネススクール博士課程修了
- 2010年～ 総合研究大学院大学学融合推進センター助教
- 2014年～ エジンバラ大学社会・政治科学研究科STISリサーチフェロー
- 2017年～ 東京大学教養学部科学技術インタープリター養成プログラム特任講師
- 2019年～ 慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室専任講師
- 2022年～ 慶應義塾大学理工学部外国語・総合教育教室准教授

【専門分野】

科学技術社会論(Science and Technology Studies)=STS(※)の中でも、科学社会学や医療社会学の視点から先端生命医学に関する研究を展開している。総合研究大学院大学では、学内の学際融合研究推進事業と「科学と社会」教育を担当。iPS細胞をめぐる稀少疾患研究の動向に興味を持ったことをきっかけに、エジンバラ大学で実施された遺伝医学に関する研究プロジェクトに参加。近年の関心は合成生物学で、特にゲノム合成(※)、分子ロボティクス(※)などの新しい研究領域における生物学と工学の融合とそれらをめぐるELSIとRRI(※)が現在の主なテーマ。

※STS(科学技術社会論)

科学と技術と社会のインターフェイスに発生する問題について、人文・社会科学の方法論を用いて探求する研究分野。

※ゲノム合成

ヒトのゲノム(全遺伝情報)が解読できるようになり、人工的にゲノムの配列を設計し再現することが可能になった。2010年には人工的に合成したゲノムを持ったマイコプラズマという細菌が作成されている。

※分子ロボティクス

生体分子を主な素材とする微小なロボットシステムを構築する研究領域。目に見えない大きさの分子ロボットを作製し、医療応用では体内から健康状態を観察したり患部に薬を運ばせたりする技術などが検討されている。

※RRI(Responsible Research & Innovation)=責任ある研究・イノベーション

2000年代後半から欧・米で使われ始めた概念。日本では、「レスポンシブルイノベーション」とも呼ばれる。研究成果の迅速な実用化を促す観点から、国の立場では、研究開発の積極的な推進と並行して、成果を社会に還元しやすくするための規制・制度見直しをはかる。社会の安心と安全を保ちながら、新しい技術の展開を進めることも重視される。

■レクチャー

「少し離れた領域から参加した研究者として、ELSI研究に思うこと」見上 公一さん

経済学という、ELSI研究分野にいるほかの研究者とは少し違ったバックグラウンドを持っている方をお招きしました。今回は見上のほか、横野恵さん(早稲田大学社会学部准教授)、白井哲哉さん(京都大学学術研究支援室企画広報グループリーダー)、東島仁さん(千葉大学国際学術研究院准教授)との座談会のかたちになりました。研究資金を提供する立場の公的機関はどのような態度をとるべきなのか、ELSI研究分野で人文社会科学系と自然科学系の研究者が協働するために必要な環境のあり方について、批判的視点から様々な意見をいただきました。

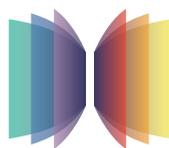
見上 聡(研究代表者、京都大学文学研究科倫理学教室教授)

■Discussion

見上さん

私は早稲田大学政治経済学部出身です。もともと経済を専攻していましたが、現実離れた「モデル」を用いて議論することがしっくりこず、もう少し実践に近いことをやりたいと思い始めました。当時は経営コンサルタントを目指していたので、研究者になるというイメージもありませんでした。海外留学したのは「マスター(修士)がとればなにかのチャンスがあるんじゃないか」と考えたことが主な理由です。留学先はオックスフォード大学に1996年にできた「サイドビジネススクール」でした。ビジネスを学問として捉えようという、アメリカのビジネススクールとは違ったアプローチを取っていて、一風変わった研究者たちが集まっていました。その中にSTSの研究グループに所属する人たちがいて、そこで私はSTSに出会うことになりました。

私の指導教員は「気候変動」が専門でしたが、「最先端の科学研究だったら何でもいよいよ」ということで、指導をお願いしました。



Pandemic ELSI

ちょうど、山中伸弥さんが2006年にマウスでiPS細胞の作成に成功し、同じ頃にイギリスでは「ステムセル(幹細胞)バンク」を作ってヒト胚性の幹細胞研究を進めるための体制の構築が進んでいました。そのような背景から、イギリスと日本の比較研究が面白いのではとアドバイスをもらい、STSの研究として再生医療を見ていくことになったというのが流れです。同じ再生医療でも、ヒト胚性幹細胞を扱うグループとiPS細胞からアプローチしようとするグループがあって、同じ目的であっても考え方が大きく違うところに興味をそそられました。

何が基準となって「目指すべき再生医療の姿」が形成されるのかに興味を持ち、博士課程の研究テーマにしました。国単位のマクロの視点から見ると感じましたが、ミクロの研究者たちのそれぞれの考え方もやはり、マクロの視点に反映されることとなります。

医療と研究のつながりと、つながりが実現されるための基礎となる法制度に目を向けてみると、例えばイギリスの「国民保健サービス」では、ある程度無料で多くの人たちが医療を受けることができます。ただそこでは、あまりに高価な、人それぞれに特化するような医療サービスは提供できないこととなります。そうなってくると、「大量に生産して、安価に使える方が望ましい」という考え方になり、ヒト胚性幹細胞を使った方がいいだろうという考え方が強くなります。一方で、日本の医療システムでは「一人一人に個別化しよう」という考え方が進んできたことに加えて、臓器移植があまり進まない状況もあって、「患者の特異性に基づいたオーダーメイド型の万能細胞を作った方がいいのではないか」という考え方がなっていました。ただその後予算的に進めることが厳しくなり、その後「誰にでも使える万能細胞を製するために細胞バンクを設けよう」という方向に変わっていくんです。

そのような流れを見ていく過程で、倫理や制度をめぐる問題が研究の方向性に大きな影響を与えるという事実を知ることになり、ELSIに関心を持ち始めたと自覚しています。

日本と海外を比較して双方でどのような研究者がELSIに関与しているのかを考えると、明確な違いが見えてきます。日本の場合は、倫理や法などの単一の学術基盤と専門性を持っている研究者が参加している印象があります。一方で海外では、科学技術に関心を持ちながらも、私が経済学の視点から関わるようになったように、様々な学問的背景の研究者が参入しています。

それから日本の場合は、実際のELSIをめぐる議論で自然科学の研究を進めるグループと他分野の研究集団の間に「対立構造」が起きやすい状況になっていると思います。例えば、最初から自然科学系と人文社会科学系の双方から見解の提示があって、そのぶつかり合いの中で落としどころを求めているという印象です。一方で海外では、科学技術の新しい知見が出てきそうな時期に、まずは自然科学系の研究者が何をしようとしているのか理解に努めるというところから始まる。「じゃあ人文社会科学系の研究者として何をしようか」という考え方が出てきて、そこが日本と海外の大きな違いなんだろうと思います。

ヨーロッパではELSIに加えてRRIという概念が広まり、外部の者として人文社会科学系の研究者がELSIに関わるというよりは、イノベーションや研究開発の流れの中に人文社会科学系の研究者が参入するという流れが求められるようになりました。ところが日本ではこうした流れがほとんど起きていなくて、2014年に「STAP細胞事件」(※)が起きたこともあって、「研究倫理に責任を持つ」というイメージでRRIの議論が

始められたと受け止めています。その結果として、人文社会科学系と自然科学系の研究者の間で距離感が埋まらなかったように感じています。両者の距離を埋める方法を考えるという視点を、私は近年の活動で最も重要視しています。

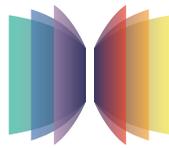
※STAP細胞事件

マウスの白血球細胞を酸で刺激すると様々な細胞に変わる性質を持たせることができたとする2本の論文が、ネイチャー誌に掲載された。執筆した理化学研究所の研究者による研究不正が疑われ、最終的に理化学研究所は一部の図表で研究不正を認定、論文は2本とも撤回された。研究に関係した著名な研究者が自殺するまでの事態になった。

もう1点、たとえば人工知能をめぐる研究とゲノム研究の分野のそれぞれにELSIをめぐる議論がありますが、それぞれの分野同士にELSIをめぐる接点がないということも課題だと思っています。誰かが互いをつなげる役割ができれば、「あっちではこんなことが動いているんだね」「こっちはこんな風に議論しているんだよ」というような見方ができて、もう少し柔軟な議論になるのではないかと期待を持っています。

日本の現状として私が危惧しているのは、トップダウンで指示的に、型にはめたかたちで「ELSIをやれ」という風潮が出てきていることです。それは私がやろうとしていることとは違います。研究を外部から評価する立場の人はいるんですが、単純に型どおりの評価をして「問題がないんだったら(承認の)ハンコを押してオッケー」というような雰囲気があって、そんなことをしていても距離は埋まらないし、根本的なところが変わらな





Pandemic ELSI

いまに、人文社会科学の側が社会の責任を全部背負うことにさえなかなないという危機感を抱いてしまいます。そして、今の状況を受け入れていると、今後もそれを受け入れ続けられないといけない。RISTEX(社会技術研究開発センター)(※)でもそうですが、研究費がついて「やるべき活動のイメージ」が提示されているんですけど、それをそのまま引き受けていたら、手段が目的化したまま定着してしまいます。こうした状況を変えないといけないと考えて、微力ながら議論を展開してきました。

※RISTEX(社会技術研究開発センター)

社会技術の研究開発を進める専門組織として2001年に設置された「社会技術研究システム」が改組され2005年に正式に発足した、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)に設けられた組織。ELSIの研究と実践、法規制に関する調査研究活動を進めている。

つまり、私たち自身も考え方を変えないといけない。私たちがやっていることは、ただ単に科学技術を評価しているということだけではなく、科学技術をめぐる議論を促しているということでもあります。同時に、そのことがそれ以外の議論を閉じているのだということにも気づかないといけない。私たちは「第三者的」に関わっているように見えて、実際には科学技術の発展の流れの中で重要な役割を果たしていることを認識する必要があります。それが認識できれば、「自分たちのやっていることは本当に正しいのか」などと、見直しの必要性が生じるので、そうした流れの中でELSIのあり方が変われば良いと考えています。

では、私たち人文社会科学系の研究者側からアプローチする時、何を考えればいいのか。このことについては自然科学系の研究者側が人文社会科学の役割をどう認識しているのが重要です。どんな距離感で接すべきなのかに関して、人文社会系から主張しても届かないという印象があります。だから一番良いのは、成功例を具体的に提示することです。現状として、成功例の共有はあまりできていないのではないのでしょうか。「ELSIを考えてうまくいった事例があるのか」と言われても、提示するのは難しい状況

です。だからELSIの必要性を実感してもらえずに、関わるのが余計に苦しくなる。

現在RISTEXの研究プロジェクトで、私は「分子ロボティクス」という分野に関わっています。その分野の中で、私自身が自分の活動記録を残す活動を始めていますが、その記録を振り返ることで課題を洗い出すことができるはずですが、うまくいったとしたら、その理由もわかりますし、認識や意識の変化、自然科学系の研究者に芽生えた方向性の変化なども見て取れます。

児玉さん

キーワードとして「人文社会科学系と自然科学系の研究者の間にある距離感」を示していただきました。成功例の提示も重要で、アーカイブの対象になりますね。人文社会科学系の研究者として考えないといけないこととして「特定の議論を促している半面、閉じさせてしまっている傾向にある問題もあるんじゃないか」というお話もありました。もう一度そのポイントを教えていただけてよかったです。

見上さん

日本では、ある程度確立したバックグラウンドを持つ研究者がELSIの議論に関わる傾向があります。そうした研究者から「参照事例」が持ち込まれて議論が始まることが多いと思います。また、そのような参照事例をベースに法制度やガイドラインを設けることがELSIの対応だという認識も強いと思います。そこで何が起きているかというと、検討の対象になる科学技術がどのように展開される状況にあるのか、これからどういう方向に進んでいくのかということ、必ずしも見ていないだろうと思うのです。対象になる科学技術のあり方を軸とすれば、議論が必要な事柄の幅も広がるだろうけれども、「参照事例」を出発点にすると、考える道筋も前もって提示されることになって、極端に言えば「チェックボックス」(手順が確認できているか確認するリスト=チェックリスト)があって、「これが終わった」「じゃあこれもこれも」という形で議論が進んで、「これでおしまいですね」とい



児玉さん

うように、決まったかたちで議論が進められる状況が作られる。その道筋に応じたELSIの議論は進むとしても、どうしてもそれ以外の議論が抜け落ちていくこととなります。こうした作業を、人文社会科学系の研究者たちが実際にやってきてしまったのではないかということが、これまでの反省点としてあげられると思っています。

児玉さん

「科学技術のあり方を議論する」際の問題のところで、イメージがまだわかりません。そこをもうちょっとだけ教えていただけませんか。

見上さん

2つあると思っています。1つは専門性という観点です。研究者の専門性は学問体系との関連で理解されることが多いと思います。児玉さんなら倫理学、横野さんは法学というように、学問体系を選出基準として委員会に呼ばれて発言を求められることが多いですね。そうすると、経済学出身でありながら科学技術に関する研究をしている私のような立場だと、「何の専門家なんですか?」ということになりがちです。結果として、バックグラウンドとしての学問体系が確立していない研究者の視点が入り入れられにくいという問題が出てきます。

もう1つは、海外のSTS研究者には理系のバックグラウンドを持つ人たちも多いため、自分たちが研究をしている中で、社会と



Pandemic
ELSI

の関係に非常に強い関心を持って移ってきたということだと思んですが、そういった人たちがかなり批判的な視点を持っているということがあると思います。科学技術と批判的に向き合うためのトレーニングもしっかりやられている。日本でもSTS分野に理系のバックグラウンドを持っている人が増えていると思います。けれども、日本の場合はどちらかというと「科学コミュニケーション」(※)の土壌が強くて。科学技術の研究を推進したいなど、本質的には「科学技術が好き」という人が多い。「こんないいものをどうして社会は受け入れてくれないんだろう」という問題意識からスタートすることも多いですね。

※科学コミュニケーション

難解で理解が難しい科学技術の内容や課題をわかりやすく社会に伝える活動。単に研究成果を紹介するのではなく、技術開発の過程で解決すべき課題、研究自体が社会に与える影響を考えることを促す学問領域でもある。

児玉さん

日本の場合、科学に対して批判的な視点を持つことが少なく、「技術開発推進ありき」になってしまいがちということですか？

見上さん

それは間違いありません。2000年代からの活動はやはり、国家戦略的な「科学技術推進のための科学コミュニケーション」の路線で進んできましたから。

白井さん

ELSIに対応するために、大学や研究機関はどのような体制組織、人材を用意すべきでしょうか。欧米にはシンクタンク機能を担う組織もありますね。



白井さん

見上さん

結構難しい課題だと思えます。日本の悪い慣習だと思いますが、自分たちが考える研究以外のことを手がける人たちを「研究補助者」のように、単に研究活動を「サポートをする人たち」だと思込む傾向が強い。例えば実験動物を飼育するグループがあったとすると、その人たちは最先端の研究をするための「サービス」を提供する人たちだと受け止められてしまうことがあるのです。

ELSIの活動に人文社会科学系の研究者が参入して意味をなすのは、「違った視点」をもたらすことで、自然科学系の研究者に一度立ち止まって考えてもらうという状況が生じた場合のほうです。ですが、「見下した」と言うと言い過ぎかもしれませんが、対等な関係性で相手を見ていない限り、「こっちは大事な研究をしているんだから、問題があるならそっちでなんとかしてくれよ」というような関係になりかねないですね。私が一番変えるべきだと思っていて、変えられる可能性があると考えているのは、研究者自身が対等な関係を築く必要性を認識して、研究に必要な専門性をほかにも求めていくということです。対話を試みたりして、ほかの人たちの見方に気づいてもらったりしないと実現は難しいですが、研究者の教育体系に組み込むことをまずやらないといけなかなと思います。

多くの研究者は、自分たちの研究は社会にとって役に立つと思っているし、そういう要素があることは間違いありません。けれども、違った視点で見たときに、その研究がどんな問題を生じさせるかとか、もしかしたら望ましい生活を送れなくなってしまう人を生んでしまうかもしれないとか、そういった研究者本人には「見えてないところ」をどうやって見せてあげられるか。そこが勝負になってくるんだと思えます。

「見えてない世界」が存在をすることにまず気づいてもらえれば、もう少し外に向かって聞く耳を持ってもらえるだろうと思います。



東島さん

東島さん

海外では、異分野の意見を聞こうという姿勢が研究者だけではなく政治家にも多いと思います。RRIのように、幅広く異分野から参加して議論を進めるという仕組みが日本でも根付けばいいなと思っています。人文社会科学系と自然科学系の対話をあえて科学コミュニケーションの枠に持ってこないところがある。たまたまRISTEXのプロジェクトに採択されると、その枠内では議論するけれど、そこで閉じて終わってしまう。知見が蓄積されない仕組みになっています。

見上さん

その点は私もRISTEXに改善を求めています。RISTEXからの研究費で私たちは活動しているんですが、私がかかわっている、分子ロボットの研究者と対話してELSIのモデルを作るという研究は、私個人で提案しても採択されなかったと思えます。分子ロボットの研究者が代表になって、自分たちで対話を進めたいと提案したところに、私が組み込まれているからできていることなんです。協働のあり方を提示することが重要という観点なのですが、今でも「何がやりたいのかわからない」と言われることがあります。

大学を中心に何ができるのか、どんな研究助成のシステムを作ろうかと考えている人たちからELSIのあり方を変えていこうという姿勢が見えてこない時がある。単にELSIに関する「チェックリスト」のようなものを作ってくれさえすればいいと思っている人もいて、そういう観点から評価されると私のやるようになっていることは「何がやりたいのかわからない」のかもしれない。

私たちがなにか今までは違うことをやって現状を「変えていきたい」と言っても、



Pandemic ELSI

評価の枠に適応しなければ採択されないだろうし、プロジェクトの中で活動したことであっても認めてもらえないかもしれない。RISTEXのような組織がELSIやRRIの議論を推進していく上では、自分たちがどんな形を理想としているのか明確に示して、それに従うプログラムを展開すればいい。明確になればもちろん外部からの批判を受けるかもしれないし、反対の声も上がってくるかもしれない。でもそういう批判や反対に、どう向き合って、説得することができるのか、あるいは、どのように自分たちの理想を変えていく必要があるのかという議論をすればいいだけなんですよね、本当は。

今はそれぞれの活動のあり方は「提案する研究者の人たちに任せています」という体裁になっている。その一方で組織としてアドバイスを評価をする人は決まっているので、特にその人たちが自分たちでELSIやRRIの議論を実践していない場合には、その人たちの持つこれまでのELSIやRRIのイメージを反映することになって、結局それが再生産されていくことになってしまうと思うんですね。

ですから、RISTEXも変わらなきゃいけない。こういった議論を先頭に立って進めてきた小林傳司さん(※)がセンター長になって期待を寄せていますが、組織全体が変わっていくというのはなかなか簡単ではないかもしれませんね。RISTEXという組織が動き始めたのが2005年で、様々な活動があって報告書も出ていますが、結局活動の「いい面」だけを示して終わってきた感じがしています。何ができなかったのか、どこに課題があったのかとか、本当はそういうところをきちんと出していくことが必要で。記録として残して蓄積していくためのプラットフォームを、研究費を出しているRISTEXがやれば本当はいいんだと思います。報告書としてきちんとまとめる、あるいは簡単に活動の報告を載せられる媒体を維持できれば、活動の報告が簡単にできるようになる。学術的な成果として認められることよりも、今後の活動にどれくらい貢献する内容なのかという軸で記録を蓄積してきたら現状は大きく違ったかもしれません。やはり何

か変えていかないと、結局同じことをずっと続けていくことになるんじゃないかと危惧しています。

※小林傳司さん

こばやし・ただし。京都大理学部生物学科出身で、自然科学系研究者の立場でSTSを専門とする研究者。STS学会の初代会長を務めた。大阪大学名誉教授で、RISTEXセンター長を2021年から務めている。国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)「サイエンスポータル」のインタビュー(2020年9月17日)に次のように語っている。「科学技術というのは、研究者の善意だけでは機能しないのです。社会が納得しない。使えるものも使えなくなる。それは研究者にとっても、社会にとっても、とても不幸なことです」「豊かな生活をもたらすはずだった科学技術が、解決の難しい新たな問題を生み出すこともある。公害などはその典型的な例です。社会が抱える課題を解決するために、どう科学技術をいかしていくか。それをしっかり議論しなければならないのです」

白井さん

欧米を中心とした海外では、大学の研究に国のお金だけではなく、寄付も潤沢に充てられています。資金面の違いから、日本では海外のようなプラットフォームやコミュニティが生まれにくいという側面があるのでしょうか。

見上さん

RRIをめぐる参考になるのはオランダとノルウェーです。国の研究予算を配分している機関が持つ決定権が違うんです。研究助成機関の中に、どんな研究助成を行っていくべきかをしっかり考えている人たちがいるんです。私たちも、同じような権限のあり方が望ましいのではないかと議論しています。ところが、日本では基本的にプログラムとして決まることなので「議論できることはないです」と言われてしまう。つまり自分たちで『こんなことやりたい』という明確なビジョンを持っていないということなのだと思います。

だから資金の量や出どころということよりも、組織の姿勢の問題の方が大きいのだと思います。与えられている職務でもそれを社会にとってより良いものするためにはどんな工夫ができるのかを考えないといけないのだけれど、それが難しい組織体制が問題の一つなのだと思います。

やり方を変えてみるのが重要で、正解は

わからないのだから、「こんなこともできるじゃないか」「面白いんじゃないか」「次やる時にはそんなこともやってみよう」というふうに、少しずつ変えていくしかない。その努力がおそらく今は実際にプロジェクトを実施する研究者のレベルでストップしているんじゃないかと思います。

横野さん

最近、国からELSI関連予算が配分される背景には、大学の人文社会科学を振興させる政策があると思います。ただ、こうした予算を付ける側にはアイデアはあまりなくて、何か企画を作って私たち研究者からアイデアを得ようとする。それで私たちが何か出しても、単に消費されるだけで、企画しただけで終わりということが続いているように思っています。見上さんは、今のそういう状況をどういうふうに見られていますか。

見上さん

トップダウンにある程度示された人文社会科学系の役割があって、「そこならお金をつけるよ」と言われている状況だと思うんです。人文社会科学系の人たちの中でもその役割にいない人たちは「自分たちには関係ないや」と思っている。「お金の割り振り方はそれでいいのか」と、疑問を感じている人が少ないように思っています。

人文社会科学系の役割は何かというと、政府が考えているような科学技術の推進、新しい科学技術のシーズが生まれて、産業が活性化してということだけでなく、



横野さん



Pandemic
ELSI

もしかしたら社会がローテクの方向に進んだとしても、多くの人たちが幸せになれる環境ができる可能性があるなどといった議論も積極的にすることだと思っています。そういう役割にもお金をつけるべきだという提案をしないといけないはずが、それも今まではなかった。非常に残念に思っています。

児玉さん

ELSIもかなり領域が広がっている。カバーする領域が多い割には人が育っていない。手広くやりすぎて、それこそもう最低限のことしかできないような状況があります。いろんな分野でのELSIを手がけている人たちの知見を、ネットワークを設けて共有する仕組みについて、意見はありますか？

見上さん

本当に難しい問題だと思います。私たちもネットワーク作りは考えたことがありました。でも、情報共有をした時に、お互いにどれくらい関心を持てるかというところに不安がありました。当事者がどういう姿勢で関わっているのかも大きいと思うんです。RISTEXが立ち上げた「ゲノム倫理研究会」という活動に関わっていますが、ゲノムをめぐる技術開発の実情を理解することが必ずしも求められていない。そうすると議論すべき技術とは一体どんなものなのかをきちんと理解しないままに、関係しそうな議論をなんとなく進めることになります。まずは当事者がある程度対象とする領域に関与する気

がないといけないはず。そうでないと、情報共有をしたとしても、情報の質に問題が生じてしまうと思うんです。「このような技術であれば、こういう議論が必要だ」という話をお互いにできなくて、非常に表層的な形で科学技術一般の課題に同意をしておしまいということになってしまう。まずはそれぞれがもっと深く関わるという方向性を確立しておかないと、情報共有は成り立たないのではないのでしょうか。

白井さん

欧米では自然科学系からELSIに入ってくる人が日本より多いと指摘なさいました。最先端の研究領域でELSIを議論する必要がありますが、その技術について理解している人材を求めないといけない。そういう人材を育成しないといけないし、人材育成の受け皿も必要です。

見上さん

自然科学系の研究者から、「自分の研究と向き合ってくれる、人文社会科学系の研究者っていないんだよね」「自分が何をやるようになっているかってことに、きちんと興味を持って理解してくれて、『じゃあこういうこと考えてなきゃいけないよね』という話を一緒にできる研究者がいない」「もっと研究を見てほしい」などの話をされたことがあります。これは衝撃的なことでした。

私も「文理融合」の掛け声のもとに、「人文社会科学系の研究者だからとりあえず呼

んでみた」という形で、研究グループに参加を求められたことがあります。私の研究内容や関心を知らないで呼ばれることってあるんですよ。そのような環境だと、私たちだって一緒にやれる気なんてしないじゃないですか。一緒に何かしようと言いながら、相手の研究領域について理解しない、あるいはその努力をしようとしなくて、そういうボタンの掛け違いも起きているのだと思います。人文社会科学の研究者も「理系の素養」を高めないといけない。個人として高めるだけではどうしても補い切れないので、自分たちの領域の問題として人材の育成にも取り組んでいかないといけないですね。

横野さん

見上さんとの議論を通じて、ELSIやRRIの現状やその問題点の理解が深まったと思います。本日は本当にありがとうございました。



<https://www.pandemic-philosophy.com>

文章構成：増田弘治

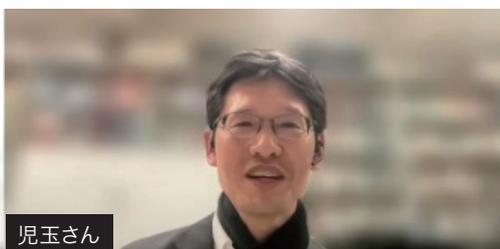
編集協力：安藤萌音、沼田詩暖

ELSIカタルシル企画：横野恵、児玉聡

記事のデザイン：株式会社リモートストーリーズ



三上さん



児玉さん



見上さん



横野さん



白井さん



東島さん